

攻勢の中にあつて、拱手傍觀の態でいたら、情勢は如何に變つていたか、一寸想像できぬものがある。

四、財界の前衛的存在

同友会創立以来經濟復興會議の橋渡しまでの期間を、同友会の組織確立の時代と称しても差支えあるまい。この時期は昏迷時代であり、個々の經營者は拠り所を求めて、続々本会に投じてきたのであつた。同友会自体も、あらゆる機会をつかみ、その主体の確立を目指し、その基礎を固めるのに全力を傾けていた。

昭和二十二年四月以降の才二年目は同友会の才二期の始まりとも云える。当番幹事は代つて堀田庄三君、故大塚万丈君が就任した。大塚君は勞資關係の在り方につき、同友会の少壯會員を糾合して研究を指導し、後にいわゆる修正資本主義試案を發表した。大塚君が独自の立場でまとめたこの試案が恰も同友会の一枚看板の如く言い伝えられ、或いは政党方面から利用される結果ともなつたが、混頓としてゐる時代に、一つの理念を把握するため全精力を傾けた大塚君の態度は、敬服に価するものが

ある。同友会の一グループを研究室とし、こゝで勉強を重ねたからこそ、後日大塚君が左翼の指導者と堂々論陣が張れたのであつた。

当時大塚君の試案をめぐり、ひいては同友会の在り方や考え方について、いろいろ批評はあつたが、大塚君が経営者精神に徹し、反共のチャンピオンとして闘つた足跡は永久に銘記されることである。才二期と目される時期には、同友会が有名無名の多くの財界人を養成し、直接間接に日本経済復興に貢献したところに特徴があつたといえよう。かようなことは財界団体として全く新しい業績を打ちたてたことを意味する。

従つて才三年目に入り、工藤昭四郎君、永野重雄君を代表幹事（当番幹事を改称）に迎えた時の同友会の陣容は既に未完成の中に完成されたものを藏しているといつた印象をはつきり示していた。

同友会の組織が、全国的に発展しつのであるので、この全国会員の連帯性を強めるため、昭和二十三年五月宇治山田市で、才一回全国大会を開いた。この大会ではインフレーション問題の研究が決議され、翌年二月ジョセフ・ドツジ氏が来朝し、インフレ終熄策に着手したとき、本会は宇治山田決議以来の研究によるインフレ対策を携え、ドツジ氏の政策批判に當つた。

この頃から同友会の動きは恰も経営者階級における前衛的役割を演ずるようになった。これは同友会が才三期の発展時代に移行したことを意味する。同友会の活動を「身軽に動く」と評されるが、そ

れは軽快に馳駆する前衛部隊なるが故に、一見身軽に動くのである。

昭和二十五年四月の総会では「多数講和を要望する」の決議をなし、今日の状勢を見通し、その方向に世論を指導し、つづいてその六月、朝鮮事変勃発後の情勢に即し、「内政を日本に移譲せよ」という声明を発表したが、これなどは日本の国民感情を卒直に表明したもので、本来ならば各方面から早く主張されて当然なことなのである。

さらに二十六年春ダレス米国大使が、講和条約草案起案のため来朝するに際しては、本会が財界各団体の思想統一を推進し、経済界の世論分裂を避けることに成功した。

顧みて、この五年間における同友会の活動は、いろいろ変遷を辿っている。しかし創立精神はあくまでも歪曲されることなく、連綿として承け継がれている。即ち経営者の同志的結合体としての存在であること、及び国民経済の安定と進歩に対するたゆまざる貢献、というこの二大目標からはずれることのない動きである。

日本経済の復興は前途遼遠である。その限り同友会に課された任務は益々重要性を増してゆくことであらう。